

2020年5月10日

「派遣される教会」

マルコ福音書16：9－13

森島 牧人 牧師

マルコによる福音書は、空の墓の異様な気配に触れたマグダラのマリアら女たちが、恐ろしさのあまりそこから逃げ去るという場面をもって結末になっています

今日の聖書は、このマルコ福音書の唐突とも言える終わり方に対し、本来あったものが散逸したのではないかとの声が多かったことにより、後になって書き加えられたのではと思われる箇所です。

ここに語られているテーマを学ぶのに先立ち、このすぐ後にある記述を見たいと思います。そこには「その後、11人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめになった。復活されたイエスを見た人々の言うことを信じなかったからである。」とあり、続いて「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」との主の言葉があります(同16：15)。私が奇異に感じるのは、弟子たちを咎められた主がその直後に彼らに宣教を命じておられることです。場面にそぐわないこの流れに首を傾げるのですが、ここに重要なことがありそうです。

女たちが、墓から逃げ去り、だれにも何も言わなかったというところで終わっているマルコ福音書。もしこれが最初のマルコ福音書の最終結論であったなら、今日の教会の存在はなかったことになりそうです。ところが、この福音書が書かれ、読まれたのは、原始キリスト教会という信仰の共同体に於いてでした。しかもその共同体が、主イエスの復活信仰を告白して形成されたのであったと言うのです。すると疑問はさらに大きくなります。

主の十字架刑の傍にもおらず、主の墓にも行かず、主の復活を目撃した者たちの言葉も信じなかった11弟子、この男たちが何故、いつから教会という復活信仰告白共同体を形づくったのか。墓場での出来事に恐れおののき、失語状態であった女たちとその話を聞いても信じなかった男たち。そのような失語という歴史を持つ群れが、現在に至るまで発語の群れとして宣教をしていることの不思議……。つまり、このことの説明のために今日の聖書箇所は後に付加されたのではと思わされるのです。

甦らせられた主は、マグダラのマリアと道を急ぐ2人に御自身を現されますが、男たちはこの目撃者の証言による主の復活も戯言として全く耳を傾けない、信じなかったのです。このことから「復活を信ずる」ということは、目撃者の証言をもってしても、存在の根拠にはなり得ない」ということ、交通事故の目撃などとは次元が異なることを、私たちは知らされます。にもかかわらず、恐れと不信仰の中から発語、宣教して行く彼ら……。どういう過程を経たのかマルコでは十分には分かりません。しかし、「復活」そのものが、「発語する力、宣教する力を持っていた」ということでありましょう。

つまり、主の復活とは、「信ずる」、「信じない」のどちらか一方の中に閉じ込められるものではなく、私たちの次元での信仰・不信仰を飛び越えたところに存在しているものなのです。そして、私たちが属しているキリスト教会の最も重要なテーマなのです。信仰告白共同体である教会の存在の根拠である福音、その福音の中心にあるのが、主の復活・イースターです。人間には信じられない出来事だったイースター、それは単なる楽しい行事であってはならないのです。

聖書には、私たちの常識では信じられないこと、私たちの知恵では理解できないことが記されています。しかし、その「分かりにくい」、「信じられない」ところに、「恐れ」と「おののき」を持つ時こそ、私たちは大事にしなければならないのです。何故なら、それこそが、神の業である主イエス・キリストの出来事、「愛」だからです。

(説教要約：羽入田悦子)